PDF 版第 11 号 2019 年 7 月 10 日発行

メコン河流域の開発、環境、生活、自然、援助を考える

フォーラム Mekong

北部タイ
中国の河川開発の影響と人々
チェンライ県の現在

メコン河は中国のチベット高原から流れ出た後、ミャンマー・ラオス国境からラオスの領土に入り、タイの北端チェンライ県で再びタイとラオスの国境と重なります。

2019 年 5 月初旬、まだ雨季が始まる気配がない酷暑の中、メコン河が流れるタイ北端のチェンライ県チェンコン郡を訪ねました。チェンコンは、タイの中で中国雲南省に一番近い位置にあり、かつてメコン・ウォッチもプロジェクトを行なっていました。メコン河開発に翻弄される最前線と言えるこの地域で、メコン河本流ダム建設の影響、地元の人たちの環境や社会への取り組みについてお話を伺いました。

寂れていく観光地：チェンコン

県の中心部にある空港から約 120km 離れ、1 日 4 本ほどのローカルバスでつながっているチェンコン郡。小さな地方都市だが、メコン河沿いの交易拠点として古い歴史を持っている。今も、中国・ラオス・タイをつなぐメコン河の水上物流の拠点として注目されている場所だ。中心部も小さな街だが、メコン河沿いの景観と対岸のラオス・ファイサイに渡ることができる国境の立地を生かした観光地でもある。街の規模にしては大きいホテルやゲストハウスがメコン河沿いに並ぶ。だが観光客の姿はまばらだ。

大きなホテルもほとんど空室だった

訪問したのは 5 月初めで観光シーズンではなかったが、2012 年、同じく酷暑の 2 月に訪れた時にはもっと賑わっていたため、最近の状況について地元の人に話を聞いてみた。

朝、対岸のファイサイの町も煙害に霞んで見えた

まず今年は、猛暑と野焼きによる煙害が影響しているとのことだった。チェンライ県は山がちな地形だが、今は切り開かれてほとんどが農地となっている。近年の煙害の主な原因は、大企業との契約で飼料用のトウモロコシを栽培する農家が山の畑に火を放つことだという。今年は記録的な降水量の少なさのため、2 ヶ月以上も霧のような薄い煙が全県を覆うこととなった。だが、県全体のデータを見ると、

観光客は年々増加傾向にある。

街を案内してくれた地元でビジネスに携わる人は、チェンコンで観光客が減った根本的な原因が別にあるという。第 4 タイ・ラオス友好橋（チェンコン–ファイサイ）の建設だ。以前は船で対岸に渡ることに風情を求めた人が、この街に投宿した。だが、2013 年に橋が完成し渡し舟は廃止。船着場にあったタイの人が好む露天の市場も、開発されたビルに移転したそうだ。川沿いの十数件の宿泊施設のうち、数件はもはや営業していない。廃業したレストランもある。営業を始めてから 40 年というゲストハウスに泊まったが、自分たち以外に客はいない。同県内で暮らす日本人も、橋ができて却ってバスの乗り換えや入管手続きに時間がかかるようになり、外国人旅行者にとっても不便だ、と話していた。

県として橋の経済効果は大きく、中国との貿易量も増えている。だが、この開発によって観光地としての魅力は減じてしまった。個人や地元の小規模な資本が行なっている観光・飲食業は、便利になったことでかなりの顧客を失ったようだ。

ラオス・ルアンパバンまで建築資材を運んでいるという船

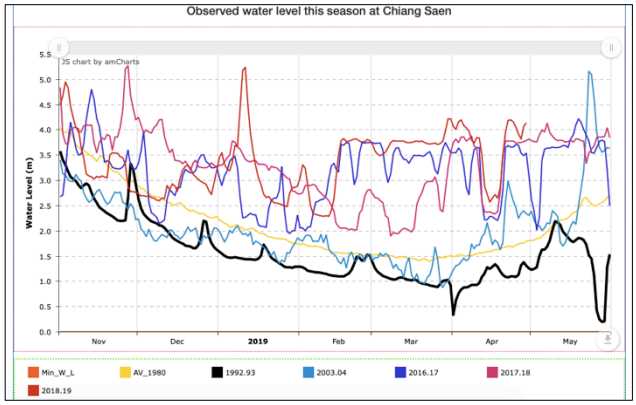
乾季の水位激変

メコン河流域には、乾季ならではの風景があった。チェンコンの位置する下流域での降雨は 6 月から 9 月ごろに集中し、川の水位も大きく変わる。この乾季、雨季との川の水位差を利用した河岸畑が広く行われていた。

訪れる観光客向けにホテルが作った河岸の畑

自然な状態であれば、川の水位は 10 月から徐々に下がり、4 月ごろに最低となり降雨とともに再び上がっていく。この時期に河岸農業が見られた。しかし今、メコン河の水位変動は上流の中国の水力発電ダムの放水に左右されている。水力発電ダムは電力需要に従い発電、つまりタービンを回すために放水する。地元の人は低い水位であると予想して作物を植えるが、そこにダムの放水があると作物が流されてしまう。市民グループが北タイや東北タイのメコン河沿いで、毎年のように被害を報告している。おそらく、ラオス側でも同様だろう。

チェンコン付近の乾季の水位変動の変化は、流域の水資源管理のために設立されたメコン河委員会（MRC）が発表するデータに現れている。以下はチェンコンから川沿いで約 60km（直線距離で 30km）上流のチェンセン・ステーションのデータだ。

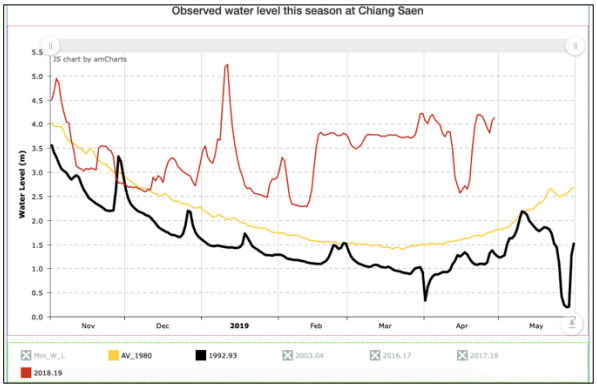


グラフ 1：チェンセンでの水位変動

（11 月から 5 月　1980 年代平均、1992–93 年、2003–04 年、2016–17 年、2017–18 年、2018–19 年）[1]

このグラフは 11 月から 5 月の乾季の水位変動を表している。1980 年代と現在を取り出してみると、大きな違いがあることがわかる。

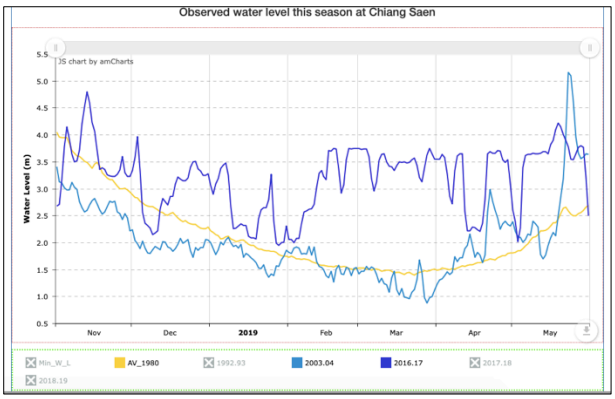
[1] グラフは以下のサイトから（MRC チェンセン・ステーション　2019 年 5 月 4 日閲覧）
http://ffw.mrcmekong.org/stations.php?StCode=CSA&StName=Chiang%20Saen



グラフ 2：チェンセンでの水位変動

（11 月から 5 月　1980 年代平均、1992-93 年、2018-19 年）

中央のなだらかな線が 1980 年代の平均だ。この時期、まだ中国領域内にメコン本流ダムはなかった。だが、それは下の太い線、1992 年に大きく変化した。それまで見られなかった突出した水位の上昇や低下がグラフに現れるようになった。11 月から 4 月はラオスより下流の地域では降雨がほぼないため、この地点での水位は上流からの流量を反映したものと言える。上の線は現在で、1992 年と比べても大きく変動していることがわかる。



グラフ 3：チェンセンでの水位変動

（11 月から 5 月　1980 年代平均、2003-04 年、2016-17 年）

提供されているデータで確認できるのは、現在のような水位変動のパターンが 2016 年からみられることだ。この時すでに、中国の領域内では少なくとも 5 つのメコン本流ダムが運転している。グラフから、乾季のこの時期の水位は、80 年代に比べ、1-2 メートルの幅で上昇していることが分かる。

一般に工学的知識のある人は、ダムからの放水によって年間の水量が「安定」することをポジティブに捉える。だが、そこに生きる生物にとってはネガティブな影響が生じる。メコン河とその支流で、乾季に水位が極端に下がるのは極めて「自然」だ。この環境に合わせて適応してきた生物にとって、人為的な大きい変化はマイナスでしかない。水位変動が狂えば、河川の生態系に大きな影響が出て、生態環境が激変してしまう。

失われる郷土の味

メコン河は透明度の低い河川だ。それでも、乾季になると水はかなり澄む。また水位も下がることで、河床に光が届き、この季節にしか増えない藻や水草が繁茂する。これらの植物は魚にとって重要な餌になる。食用に適した種類もある。チェンコンやラオスの世界遺産になったルアンパバンで「ガイ（クライナーム）」または「カイ」と呼ばれる川苔がそれだ。

川苔（写真はルアンパバンで 2009 年に撮影）

ルアンパバンでの川苔採取の様子

（2009 年に撮影のビデオからキャプチャー）

地元で季節の食材として親しまれていたものだが、観光客の増加とともに特産品として有名になり、地元経済を潤してきた。だが、乾季にダムの放水があることで、この川苔の生産もここ数年で危機的な状況となっている。

地元の環境保全グループ「チェンコンを愛する会」のメンバー、ソムキアット・クアンチエンサーさんは、「中国はメコンに8つのダムを造る予定だ。最初のマンワンダム(1995年に完成)が建設された時には、まだ影響ははっきりしなかったが、3 つ目のダムが出来た頃に顕在化してきた[2]。1世帯で1日500バーツほど採れるのだが、ダムの放水による水位の変動で川苔が枯れ、収穫期が4ヶ月から2ヶ月と短くなった」と話す。これらの藻類は、人の食料であるだけでなく魚の餌になり、食物連鎖の底辺を支えているはずだ。魚への影響は甚大だと考えられる。ここにさらに、ラオスでサイヤブリダムも建設され、住民は負の影響を強く憂慮している。

実際、会の調査でも、魚は激減しているそうだ。目に見える形で影響もある。以前はチェンコンと近隣の2郡を合わせ1,000隻ほどの漁船があったが、今は約 300 隻になってしまった。河岸で採れる 60 種の食用植物も減っている。乾季に川の中洲などに産卵する鳥の生態にも影響が出ており、会が確認した 18 種類全てで河川環境の変化の影響が見られるという。つまり、中国やラオスで建設されたダムの影響は、数百キロ下流のチェンライ県でも顕著だということだ。だが、今まで作られた中国やラオスのメコン本流ダム事業で、数百キロ下流の河川生態系への影響は、事前に考慮されたことがない。

メコン河流域の環境変化と住民運動

「チェンコンを愛する会」は、1990年代始め、タイのチャーチャーイ首相が、「インドシナを戦場から市場へ」のスローガンのもと、経済開発政策を強く打ち出した頃にネットワークとして活動を始めた。1992年の騒乱で軍が市民に発砲し、多くの死亡者を出した「5 月の流血事件」の反省から制定された先進的な 1997 年憲法の元、上院議員選出が選挙制となり、市民グループのメンバーも議員となり活動は活発になっていく（ちなみに 2014 年に成立した軍事政権下で再び任命制に逆戻りしている）。また、この憲法下で国家人権委員会や憲法裁判所などの独立機関が作られ、市民活動の場が広がった時代だった。

会は、日本政府がかつて強い関心を持っていた大規模導水、コックインナン事業[3]に対する反対キャンペーンなどに取り組んだ。同事業はキャンセルされたが、2000年ごろ今度は中国が、メコン河に大型船を航行させるため上流部を浚渫するという計画が持ち上がった。この浚渫は、川苔などに影響する他、未だに詳しい生態が不明な世界一大きい淡水魚、メコンオオナマズの産卵地を破壊することが懸念され、会はキャンペーンを行なった。

メコン・ウォッチも当時、地元住民や NGO と協力し調査を行なっている[4]。その後、市民の懸念の声が政府に届いたこと、また、政府内でも浚渫によりメコン河の流れが変れば、国境線が変化し、安全保障上の問題に発展することが問題視され、事業は中断した。

この頃、「チェンコンを愛する会」は劣化する川の環境を懸念し、メコン・ウォッチと共同で支流のイン川で保全活動を始めた。イン川は隣県パヤオ県から流れ出し、トゥーン郡などを通りメコンに合流する。イン川では当時、農業による開拓や開発により河畔林や河川周辺の湿地が失われていた。当時のメコン・ウォッチと「チェンコンを愛する会」のスタッフは、住民と一緒に何度も他県の保全活動を見学し知見を深め、チェンライ県トゥーン郡で初めての魚の保全区を設置した。失敗もあったが活動は続き、保全から5年程で大きな魚が戻ってくるなど目に見える成果があがった。日本からの支援が終わっても住民の自主的な動きが続き、最終的にイン川では17村が保全区を持つまでになった。

---

[2] 現在中国はメコン河（瀾滄江）に5つのダムを建設済みで、さらに3つのダムを建設中の模様だ。
https://www.chiangraitimes.com/researchers-funded-by-nasa-seek-ways-to-improve-dams-on-mekong-river.html/mekong-mainstream-dams

[3] メコン河支流のコック川とイン川の水を、チャオプラヤ川支流のナン川に導水して、「水不足」とされる中部平原を潤そうとした計画だった。

[4] 上流浚渫事業に関してはこちらに情報をまとめている。
http://www.mekongwatch.org/report/tb/rapidblasting.html

住民がイン川に作った保全区。見ている間に大きな魚が何度も跳ねて背を見せた

川の周辺では河畔林も保全されている。雨季に水没するここは、産卵地や稚魚が育つ場として重要だ。

ガームムアン村保全地区の河畔林

また、会はこれまでの活動を基盤に、ホンヒアン・メナムコーン（メコン河学校）という活動も立ち上げた。もともと、地域の人たちにダムに反対する人たちが自分たちの集めた情報を共有するものだったが、やがて川への理解を環境面だけでなく、歴史や文化やアートといった面まで広げ、広い支持を得た。会はそれまで、「反対運動をする人たち」として行政から敬遠されていたが、この教育活動を通じ、今は様々なアクターと協力関係を作り上げている。また、この経験から、上流のパヤオ県から下流のチェンライ県を含む「イン川市民会議」という住民ネットワークを作り上げることにも成功した。

これまでの成果は出版もされている

続く大規模開発、中国の投資の影響の下で

チェンコンからチェンライ市街地に向かう幹線道路を走ると、道沿いの水田に「土地売ります」の看板が連なっている。地元の人の話では、十数年前、1ライ（0.16ha）あたり3万バーツ（現在1バーツ約3.5円）が、すぐに10倍になり、既に3回くらい土地転がしされているという。現時点の土地ブローカーの言い値は600万バーツだそうだ。チェンライ県ではタイ政府が進める経済特別区（SEZ）の計画があり、土地を求める企業がいるからだ。

実は数年前、イン川の流域の河畔林「ブンルアン」が、このSEZの計画対象地だった。政府の分類で河畔林は、頻繁に洪水する荒廃地にあたるため、価値がないとされたからだ。

乾季は歩いて森に入れるが雨季には同じ場所を船で行く

チェンコンを愛する会や近隣住民は、この森の価値を様々な面で調査し、粘り強く社会に発信した。最近、県から指定解除を勝ち取ったという。ブンルアンの森に入ると樹木を紹介するパネルがある他、この森がどのくらい二酸化炭素を固定しているか、

といった情報が手に入り、多くの見学者を集めている。

森の木々には学名のパネルがつけられている

今、会の関わる保全活動は、川の保全区だけでなくこのような河畔林を守ることに広がった。今後は、在来種の樹木の植林を実験し、小動物などが移動可能な河岸のグリーンベルトを作りたいという。またこの地域の浸水林をラムサール条約湿地に登録することも目指している。

森を案内してくれたソムキアットさん

ソムキアットさんは、「中国だけでなく、ラオスではメコン本流に、サイヤブリとドンサホンダムができる。さらにパクベンダムの建設が始まろうとしている。パクベンについては、事業主体である中国企業・大唐国際発電（ダタンインターナショナル）が私たちに対話を申し出てきた。企業は『ダム建設のグッドプラクティス』を作りたいようだ。だが、こちらはダムを作って影響を緩和してもらうのではなく、もし建設したらどんな影響があるかをはっきりさせたい。タイにどう影響するか一緒に検証しようと思う。タイの研究者も巻き込み、NGO や村人の懸念を、事業がクリアできるのか確認したい」という。

中国によるメコン本流ダム開発は今後も続き、上流浚渫事業も復活している（現在は再び中断中）。資本が軽々と国境を超えるようになって久しい。だが、次々とやってくる大規模開発に翻弄されるだけのように見える人々は、実は力強く地域を守り続けてきた。

一方で新しい悩みもある。経済発展によりタイは被援助国でなくなった。市民活動は、海外の財団などから資金を得て専従スタッフを持つことが難しくなっている。ソムキアットさんは、調査研究や行政機関で有識者として関わりながら政策提言を続けているが、活動スタッフの人件費が確保できないことで、若い人たちが継続的に関わりにくくなっていると話す。日本と同じように、次世代を育てることが難しい、という問題を抱えるようになっているのだ。

これまで、力強いタイの市民活動からは、支援するというより協力する中で学ばせてもらうことが圧倒的に多かったが、今後は、共通する悩みについても、協力した取り組みが必要になっていると感じた。

（文責：メコン・ウォッチ　木口由香）

《ご支援のお願い》

メコン・ウォッチが政策提言や調査研究を続けられるよう、活動に理解を寄せてくださる皆様にご協力をお願いしております。会員も募集中です。

■ご寄付・会費のお振込み先■

◆郵便振替 口座番号 00190-6-418819

加入者名 メコン・ウォッチ

◆ゆうちょ銀行口座 口座番号 10080-82667871

加入者名 トクヒ　メコン・ウォッチ

■パンフレット配布協力■

周囲の方にメコン・ウォッチをご紹介ください。また、パンフレットを置かせていただける場所も随時募集中です。

特定非営利活動法人メコン・ウォッチ

〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11　青木ビル 3F

電話：03-3832-5034　FAX：03-3832-5039